

佳作

おならの理屈

又吉演

「おならの理屈」・登場人物表

玉城満男（40／50／70／60）

春子の夫。貴美子の父。

玉城春子（40／50／60）

満男の妻。貴美子の母。

玉城貴美子（18／28／48）

満男と春子の娘。

隆 (21 / 31)

村の小さなカフェのオーナー。

初子 (69)

春子の姉。貴美子の叔母。「はっちゃんオバサン」の愛称。

エキストラ

掃除のおばあ

ポリタンクの中年

「おならの理屈」・あらすじ

玉城家は夫婦2人に娘1人の3人家族。

満男はいつも下らない雑学のような出鱈目のような屁理屈話と、おならばかりをする父親。母親の春子は笑い上戸だが、満男の屁理屈話にはやや慣れてきている。夫婦は年齢を重ね、娘は成長する。家族の日常の時間はいつも満男のおならと屁理屈と共に変化していく。

娘は嫁ぎ、妻は他界した。

70歳を過ぎた満男は結局一人になったが、家族の愛は変わらず…おならも屁理屈も変わらなかつた。

1. 集落（早朝）

(F・I)

路地をランニングしている満男（40）。

道を掃除するおばあ。

満男 「おはようございます」

おばあ 「はい、おはよう」

おばあの横を通り過ぎる満男。

2. 集落から抜けた広い道（早朝）

路地を抜け海が一望できる広い道を走る満男。

3. 湧き水近くの坂道（早朝）

満男、坂道まで来るとランニングをやめ、呼吸を整えると、手ぬぐいで汗をぬぐいながら坂道を歩いて降り始める。

坂道から見える海。

4. 湧き水（早朝）

満男、湧き水の取水口から流れる水に頭をつっこみ、水浴びをして、ごくぐくと飲む。濡れた頭や顔を手ぬぐいで拭いていると、ポリタンクを持った若者、隆（21）が現れる。

隆 「おはようございます。」

満男 「おはよう。あれ？ 今日ちよつと早いね。」

隆 「最近、お客様増えちゃって……ちよつと多めに水汲まないと、間に合わないんすよ。」

満男 「あげ！カフェっていうのは、そんなに儲かるのか？良かったさ！だあ、小遣い貰おう。（笑う）」

隆 「（笑いながら）そんなに儲かってないですって。」

満男 「そうかカフェは儲からんか。若者は儲からん仕事してないで、儲かる仕事しないと！お金は買ってでも集めないとね！」

満男、笑って小走りに立ち去る。坂を登る。

坂を登る笑顔の満男の向こうに、美しい海。

ポリタンクを持った中年男性とすれ違う。

5. 満男の家・台所（朝）

妻の春子（40）が料理をしている。

娘の貴美子（18）は高校の制服姿でそれを手伝い、テーブルに料理を運んだりしている。

貴美子 「あ。お母さん、あたしの分はいらない。」

春子 「またあ？もう、朝はしっかり食べないと。また前みたいに貧

血で倒れたりするのに……」

貴美子 「（春子の台詞さえぎって）あ！パン食べる！パン！ちゃんと途中で買って食べるから！」

貴美子、バタバタと台所から出ていく。

満男、トイレを流す音をバツクに、鼻歌混じりで貴美子とすれ違いに台所へ。かりゆしウエア姿。冷蔵庫から牛乳を取り出し、足で冷蔵庫のドアを閉める。

春子 「もう。足で閉めないの。」

満男 「ああ。すまん、すまん。」

満男、食器棚からコップを3つ取り出す。テーブルにつき、牛乳を3つのコップに注いで、1つをごくごく飲み、新聞を広げる。

貴美子、急いで台所へ入り、3つの牛乳のうち、1つを急いで飲み干して出ていく。

貴美子 「行ってきまゝす。」

春子、テーブルにつく。満男は新聞を畳む。

満男・春子 「いただきます。」

食事を始める。

しばらく無言で食事をしている。

急に動きが止まる満男。

あきれた表情の春子。

プ、という、おならの音。

春子 「よくもまあ、毎朝、毎朝……」

満男 「仕方ないさ。24時間オーブンなのに。俺の大腸は。プーは我慢すると体に良くないんだよ。」

春子 「また屁理屈を……」

満男 「お。初子義姉さんに貰った明太子、超うまいな！

さて。沖縄ではプーと言うが、標準語では屁だな。屁のような事について真面目に理屈を言うから屁理屈か。屁みたいな理屈だから屁理屈か。春子、どっちか分かるか？」

春子、黙ってぱくぱく食べる。

満男 「そもそも俺の記憶が確かなら、屁についての理屈が書かれた最初は論語だな。『子曰わく、食をたらしめ、屁をたらしめ、民をして信あらしめよ』と言ってだな。まず食事をし、屁をこいて、民を信じれば、自ずと道が開ける。という意味だな。孔

子は見ぬいていたね。本質を。沖縄で言えば名護親方（なごえーかた）こと程順則（ていじゆんそく）だ。六諭衍義（りくゆえんぎ）には『考順父母』（こうじゆんふぼ）つまり『父母（ふぼ）に考順（こうじゆん）なれ』父と母に感謝・孝行しなさいという教えをはじめ、6つの教えがあるが、その中に『各々（おのおの）の生理に安（やす）んぜよ』と言う教えがある。生理現象は各々が、あるがまま受け入れなさい。と言っているんだ。昔からプーは我慢せず、あるがままを受け入れる。それが教養というものなんだな。」

春子、呆れ顔で黙ってぱくぱく食べる。

満男 「（急に慌てて）ああ、ちよつと、春子、春子、手貸して、手貸して」

春子、驚いて手を差し出すと、満男、春子の手を取り、春子の手を上げ

ると同時にプくと、屁をする。あまりのバカバカしさに、春子、ふき出す。

春子 「もう、ホント。何でこんな馬鹿と結婚したんだろ。」

満男 「うん。馬鹿というのはね、馬を指さし、これは鹿ですか?と

問うことから…」

春子 「(満男の台詞さえぎって) やかましい！」

やや間があって

満男 「ぐ無礼さびたん(意・申し訳ございません)」

2人、ぱくぱく食事をする。

春子、3つの牛乳の最後の1つをごくごく飲む。

満男・春子 「ごちそうさまでした。」

(F・O)

6. 集落 (早朝) (年経過)

(F・I)

集落の路地をウォーキングしている満男(50)と春子(50)。道を掃除するおばあ。

満男・春子 「おはようございます。」

おばあ 「はい、おはよう」

おばあの横を通り過ぎる満男と春子。

7. 集落から抜けた広い道(早朝)

路地を抜け、海が一望できる広い道を歩く満男と春子。

8. 湧き水近くの坂道(早朝)

満男と春子、手ぬぐいで汗をぬぐいながら坂道を歩いて降り始める。坂道から見える海。

9. 湧き水(早朝)

満男、頭をつつこまず顔を洗い、ごくごくと飲む。

入れ替わりで、春子も少し水をすくって飲む。

2人、濡れた顔を手ぬぐいで拭いていると、ポリタンクを持った隆(31)が現れる。

隆 「おはようございます。」

春子 「おはよう。」

満男、隆を子供っぽく無視する。

そこへ貴美子(27)がポリタンクを持って現れる。

貴美子 「あ。お父さん、お母さん、おはよう」

春子 「おはよう。」

満男、貴美子も子供っぽく無視して、そそくさと先に立ち去る。

隆 「(春子へ) 満男さん：まだ機嫌悪いですか？」

春子 「大丈夫よ。ちよつと驚いたただけだから。そのうち、また機嫌

も戻るさあ。」

貴美子 「(隆へ) 超長〜いウンチク説教聞くよりは、無視されてる方が

楽かもよ〜。」

隆 「(貴美子へ) 何だよそれ。他人事みたいに言うなよ。」

春子 「ふふふ。あら、もう夫婦喧嘩?」

貴美子 「でも、お母さんも、お父さんにちゃんと行ってよ!

春子、返事せず笑って小走りに立ち去る。坂を登る。

坂を登る春子の向こうに、美しい海。

春子を待つてしばらく坂で立ち止まっていた満男、

春子が来るのを確認すると坂を2人で登りはじめる。

途中、ポリタンクを持った初老男性とすれ違う。

10. 満男の家・台所 (朝)

妻の春子 (50) が料理をしている。

満男、トイレを流す音をバツクに、鼻歌混じりで台所へ。

スーツ姿。冷蔵庫から牛乳を取り出し、足で冷蔵庫のドアを閉める。

春子 「もう。足で閉めないの。」

満男 「ああ。すまん、すまん。」

満男、食器棚からコップを3つ取り出す。

テーブルに着き、牛乳を3つのコップに注いで、1つを、ごくごく飲み、新聞を広げる。

やや間があつて、満男、まだ牛乳の入っている2つのコップを見る。

春子、テーブルにつく。満男は新聞をたたむ。

満男・春子 「いただきます。」

2人、食事を始める。

しばらく無言で食事をしている。

急に動きが止まる。満男。

無表情の春子。

プ、という、おならの音。

春子 「貴美子、少し寂しそうでしたよ…いいじゃないですか、隆さん。

いい人ですよ。」

満男 「(ため息) もう、プーについては反応なしか…。」

春子、思わず笑う。

春子 「あなたって人は本当にもう…。」

満男 「古代エジプト人はおならを崇拜し、ギリシャの哲学者はおな

らをする自由と権利を説いたらしいな。ウチナーグチではプー。
やんばるの方言ではピー。日本語では屁だが、フランス語では
『ぺ』と発音するそうだ。フランス語の方が日本語より、実際
のおならの音に近いし、沖縄方言にも近い気がするのが興味深
い。

そうそう！英語が凄い。F a r t (フォート)だよ。フォート！

Frequency (フリクンシー) のエフ。…フリクンシーとは周波数という意味だが、そのエフで始まって、その後がエーアルティーでアート！つまり周波数の芸術だよ！全てのプーは芸術に通じる…管楽器としての肉体！…そもそも、プーをしながら争う人はいないんだよ。屁をもって和となす。まさに、平和（へーわ）だねえ…。『ぴーぴっちゃる』と言えばやんばるの方言で…」

春子 「(満男の台詞をさえぎって) もーやかましい！」
やや間があって

満男 「ぐ無礼さびたん」
2人、ぱくぱく食事をする。

春子、3つの牛乳の最後の1つをごくごく飲む。

満男、残った1つを見て、手にとって一気に飲み干す。

満男・春子 「ごちそうさまでした。」

(F・O)

11. 集落 (早朝) (年経過)

(F・I)

道を掃除するおばあ。

12. 集落から抜けた広い道 (昼)

海が一望できる広い道。誰もいない。

13. 湧き水近くの坂道 (夕方)

誰もいない坂道。坂道から見える海。

14. 湧き水 (夜)

誰もいない湧き水。

15. 満男の家・台所 (夜)

貴美子 (38) が食器を洗っている。喪服。

満男、トイレを流す音をバツクに、大きなため息をつきながら台所へ。

喪服のネクタイをゆるめながら冷蔵庫の前に。

ビール瓶とタッパーを取り出し、足で冷蔵庫のドアを閉める。

貴美子 「もう。足で閉めないの。」

満男 「ああ。すまん、すまん。」

満男、食器棚からコップを3つ取り出す。テーブルに着き、

ビールの栓を抜く。3つのコップを眺める満男。

満男 「貴美子…は、飲まないよな？」

貴美子 「うん。」

満男、何度かうなずくと、コップ2つを脇に寄せ、1つにビールを注ぐ。

満男、黙々とビールを飲みながら、タッパーのつまみを食べる。

ひどく疲れた様子。黙々と洗い物を続ける貴美子。

初子（はっちゃん叔母さん）、台所へ来る。喪服。

初子 「満男さん、ビール飲んでるの?」

満男、立ち上がるとうとするのを初子が制し、自分も側に座る。

初子 「これ誰の?」

初子、テーブルのコップを視線で指す。

満男 「あ? ああ、義姉さん、使って。」

満男、コップを取り初子へ渡し、ビールを注ぐ。

貴美子、箸を叔母に渡し、洗い物を続ける。初子もビールを飲み、

タッパーのつまみをつつく。

3人とも無言。洗い物の音。

初子 「でもねえ…。」

しばらくの間

初子 「頑張ったよね。最後まで。春子があれば頑張れたのは、あ

んな達がいたからさ。」

満男、ビール瓶を見つめたまま。初子、満男の腕にそつと触れる。

初子 「あんまりね。気を落としたら駄目よう。辛いのはわかるけどね。

満男さん、あんたがしつかりしないと。」

満男、無理矢理に笑顔を作り、うなづく。

初子、こみ上げてくるものを誤魔化すように、「だあ」と立ち上がる。

初子 「キミちゃん、おばさんが洗いもん手伝うさ。」

貴美子 「うううん。いいよ。もう終わるから。」

初子 「はっしえ。こんなのは遠慮したら駄目よ」

貴美子 「ううん。ホント、今終わるのに。ほら、終わった。」

貴美子、洗い物が終わり、水道を止め、手ぬぐいで手を拭きながら

初子に向き合う。

貴美子 「はっちゃんおばさん、今日は本当にありがとね。」

初子 「うううん。私は何でもないさ。」

貴美子 「いつ帰るの?」

初子 「明日さ。空港までは隆さんが送ってくれるかね?」

貴美子 「うん。大丈夫よ。カフェはバイトの子で大丈夫だから、今週いつ

ぱいは休むって。今日はどうするの?私、送るよ?」

初子 「いいよ、いらん。あんたは疲れてるでしょ。今日はタクシーさ。」

貴美子 「大丈夫よ、遠慮したら駄目って、さつき、はっちゃんおばさ

んも言ったさ。」

初子 「はっしえ。こんなのは年寄りの言う事聞かんとダメよ。」

初子、壁の時計見る。つられて貴美子も、満男も、3人で時計を見る。

初子 「はい。私もそろそろ帰ろうかね。」

初子、台所から出ていく。貴美子、初子の後を追って出ていく。

黙々とビールを飲む満男。

貴美子 (OFF) 「ああ!はっちゃんおばさんちよつと待って。」

紙袋のガサガサいう音。

初子（OFF） 「いいん。3つもいらんよー。」

貴美子（OFF） 「いいよ、ケン坊達にも！」

初子（OFF） 「…そうねえ？」

初子（OFF） 「ありがとうねえ。じゃあ、帰ろうね。（大きな声で）
満男さん、四十九日にはまた休み取って来るからね。」

満男 「（やや大きめの声で画面の外に向かい）あ。義姉さん、気をつ
けて！ありがとうね！」

ドアの閉まる音。

しばらくの静寂。

台所に戻った貴美子。先ほど初子が座った所にどかっと腰掛ける。

貴美子 「あー！疲れたー！」

貴美子、テーブルにうつぶせになる。

静かにビールを飲む満男。

満男 「メイとユイは？」

貴美子、うつぶせから起き上がって、満男を見る。

貴美子 「隆が家連れてったよ。あまり寝てないからね。寝てるはず。」

貴美子、あくびをして、またうつ伏せになる。

静寂。

貴美子 「(うつ伏せのまま) お父さん……。」

満男 「(間をおいて) うん？」

しばらくの間。

貴美子 「(うつぶせのまま) ご飯も入れるね？」

満男 「ああ……うーん……ご飯はいらんよ……。ビールあるから。」

突然、満男が一瞬止まる。「ぷ」っとおならの音。

やや間があって、うつ伏せになりながら、貴美子、くすくす笑い。

貴美子 「(起き上がり、笑いながら) えー、もーお父さんよー。」

満男 「ん〜?」

貴美子が一瞬止まる。

貴美子 「あげ。でーじー! くさいー、も〜いや〜」

貴美子、くすくす笑いが、だんだんツボにはまったように、笑いが大きくなっていく。つられて満男も笑ってくる。2人とも、だんだんバカみたいな大笑いになる。

ヒーヒー言いながら涙を流し、お腹を押さえ笑い、笑い涙をふいたり。笑いの高波が去り、一瞬黙るが、たまらず吹き出したり。ゲラゲラ笑う。しかし、次第に、はーはー、ひーひー、ふーふーと段々と笑いが収まっていく。

満男 「(少し笑いながら) 人間は…。」

貴美子 「え?」

満男 「(笑いながら) 人間は、どんなに悲しい時でも、おならが出る

んだなあ…生きているからだなあ…。」

満男、言い終わると同時に涙が溢れ、たまらず号泣する。

貴美子 「お父さん…」

貴美子もたまらず涙が溢れる。子供のように、鼻水も流しながら、台所で号泣し嗚咽する2人。

(F・O)

16. 集落 (早朝) (年経過)

(F・I)

道を掃除するおばあ。

17. 集落から抜けた広い道 (早朝)

海が一望できる広い道。誰もいない。

18. 湧き水近くの坂道 (早朝)

誰もいない坂道。坂道から見える海。

19. 湧き水（早朝）

誰もいない湧き水。

20. 満男の家・台所（昼）

満男（70）、トイレを流す音をバツクに、大きな咳をしながら台所へ。

古いジャージ。冷蔵庫の前に。牛乳を取り出し、ちゃんと手で冷蔵庫のドアを閉める。

満男 「（冷蔵庫を指差し）よし。」

満男、食器棚からコップを1つ取り出す。テーブルに着き、牛乳をついで、飲む。少しだけ苦しそうに胸を押さえる。

老眼鏡を取り出し、かけてから新聞を広げる。

× × ×

電子レンジの音が鳴る。満男、テーブルからゆっくり立ち、レンジから

ご飯とおかずを取り出して、テーブルに戻る。

満男、声をあげずに「いただきます」をして、食事をはじめ。

しばらく食べている満男。

急に動きが止まる。

おならの音は：ならず：胸を押さえる。

辛そうに、顔をしかめるが、しばらくすると少し楽な表情になる。

テーブルのコーヒーメーカーからテーブルにあったコーヒーカップに

コーヒーを注ぎ、グラスにあった牛乳をカップに入れて飲む。

大きなため息をすると、大分落ち着いた表情になる。

突然、携帯の着信音になる。

携帯に出る満男。

満男 「はい、もしもし。沖縄県警です。（と言って少し自分で笑う）

…ああ？明日ね？いいよ、うん。うん。わかった。だあ、ちよっ

と、メイに代わってごらん。…メイね？はい、おじいよ！誕生日、何欲しいの？遠慮しなくていいよ。おじいは金持ちだから。メイがもう少し大きくなったら、おじいの持っているアツプルの株あげるさ。また、新製品出すみたいだから、株価も上がるよ。ん？はあ、冗談さ（笑）。メイはホントに素直だねえ…。誕生日は何が欲しい？うん。新しいのね。うん。わかった。買ってあげるさ。

だあ、ユイに代わってごらん。…はい、おじいよ！ユイは試合どうだったの？勝ったの？そうねえ。頑張ったねえ。はあ。九州大会か。お前はお父さんに似ないで良かったねー。九州大会の前はおじいの家おいでね。小遣いあげるから。遠慮しなくていいよ。おじいは金持ちだからね。ユイがもう少し大きくなったら、おじいの持っているフェイスブックの株あげるさ。ん？

はーっしゃ、冗談さ。お前達はホントに素直だねえ…。

お母さんに代わってごらん。…もしもし。じゃ明日な。ん？お前じゃなくて隆が来るのか？じゃあ、コーヒー持たせて。わかっているよ。大丈夫だから。そんなには飲まないから。うん。うん。ああっ！

満男、急に苦しそうな表情。

胸を押さえる。

満男 「ああっ！貴美子！貴美子！」

大きな声になりながら、前のめりになる。

苦しそうな顔。

しかし、突然、携帯を尻に持って行き、ぷく、とおならをする。

満足そうな顔の満男。

満男、再び携帯に耳をあてる。

ツーツーツーという電話を切られた音。

満男、老眼で少し携帯を離して電話をかける。

満男 「ぐ無礼さびたん」

(F・O)

21. 満男の家・台所 (昼) (年逆経過)

(F・I)

満男 (60) が食器を洗っている。

春子がテーブルについているが、車椅子。頭にはニット帽。コーヒーを飲んでいる。

満男 「はい、今終わるさーね。ちょっと待ってね。」

春子 「大丈夫よ。急がなくても。今日はちょっと楽だし。」

「ぷー」というおならの音。

満男、食器洗いをやめ、真顔でびたっと止まっている。

手を拭きながらゆっくりと振り向く。ニタニタ顔。

春子、顔を手で隠しているが、耳が真っ赤。

満男 「あーんち（こんな）に）可愛いプー！あいえー誰かね？マヤー
ぐあー（意・子猫）かね？キジムナーかね？（鼻をならして）
臭いを辿れば犯人は見つかるね。僕は名探偵ホームズ全巻読ん
でドラマも見て推理の勉強したからね。間違いないよ。」

春子 「もう、嫌〜！洗い物の音でわからんと思ったの〜。もうお
尻の筋肉もゆるんでるんだはず。もー、自分で自分が嫌さあ〜。
もう嫌いでしょ。もー嫌いだはず。もー。」

満男 「あい、こっちに可愛い子がいる。この子が犯人かな。だあ、
お顔見せてごらん、はい。顔見せて」

顔を手で覆う春子の手を解く

満男 「うり。犯人見つけた！可愛い子だ！おならもしたけど、僕の

心の泥棒もした泥棒さんだね！僕の事クラリス・ド・カリオス
トロって呼んでもいいんだよ、泥棒さん」

満男、春子に「チュッ」とキスをする。

抱き合う2人。

満男 「お前のおならを聞ける男は、世界中で俺だけだな。」

春子、照れながら笑う。

満男、食器洗いに戻りながら

満男 「東北では『屁っぴり嫁ご』や『屁ひり女房』という昔話があつてだな。」

春子 「何それ、また出鱈目いって〜」

春子、くすくす笑う。

満男 「いや、本当だって！『まんが日本むかし話』でアニメにもなつてたよ。見たことないのか？女房が屁をして、姑を吹き飛ばし

たり、柿の木の柿を屁で落したりだ。それで、最後は屁をする嫁のために、屁をするための家を作って、それが屁の家、つまり部屋になったという話だ。」

春子、爆笑している。

満男 「昔話と言えば河童だな。屁の河童とは簡単なこと、取るに足らない事みたいの意味だが、そもそもは順番が逆。本当なら河童の屁。と言わないと順序がおかしいだろ？船の先端を「へさき」というが、河童も水に浮くから屁が先になったんだな。

日本最古の漫画とも言われる鳥獣戯画（ちようじゆうぎが）は、鳥羽僧正（とばそうじよう）こと覚猷（かくゆう）が作者という説があるが、もう一つの傑作、放屁合戦（ほうひがっせん）の絵巻はあまり知られていないな。」

春子、やさしく微笑みながら目を閉じ、満男の話を聞き入る。

満男

「男女入り乱れ、素っ裸で屁を放つ姿は鳥獣戯画より面白く、むしろこつちを国宝にして欲しいと思うのだが、おならが主題だと、国宝にはなれないか。屁はこくほうなんだがな。」

平賀源内の『放屁論』は安永3年。1774年に書かれているが、そもそも日本には昔から屁の道、屁道というのがあって、実際にプロの屁こきがいたんだそうだ。曲屁(きよくべ)曲放(きよくひり)とって…」

(F・O)

(終わり)